

## インドネシアを訪れて

大山 達雄

1982年という年は、私にとって2度もインドネシアを訪れるという、まさにインドネシアづいた年になりました。もとはといえば日本学術振興会の国際研究交流の一環として、「インドネシア発展計画作成のためのエネルギーモデルの開発」を目的とした基礎作業的なもの（線形計画法、回帰分析法等の理論と応用の紹介を含む）を協力するという名目なのですが、こういう“大事業”に対して私の訪問がどこまで有益かとなるとはなはだ疑問を感ずるばかりです。

インドネシアは赤道直下に位置し人口1億5000万人、そして約1万3000の島々から成る総面積約190万km<sup>2</sup>（日本の約5倍）の国です。その歴史は古くは旧石器時代のジャワ原人の時代から仏教、ヒンズー教の時代（7～14世紀）、イスラム教の時代（15世紀）、オランダ統治時代（16～20世紀）、そして1945年のスカルノによる共和国成立まで常に彼らの文化は他の何らかの文化の影響を大きく受けてきているといえるでしょう。

インドネシアを訪れてみてまず思ったことは、表通りの一流ホテルなどに見られる“超近代的”なものとそのすぐ裏通りに見られる汚ないどぶ川、スラム街などの“前近代的”なもののが驚くほどみごとに混在しているということでした。ジャカルタの目抜き通りは、激しく自動車（ほとんどが日本製）が行き交う両側に近代的な高層ビルが立ち並び、まるで東京都心の通りを思わせます。一方それから1ブロック隔てると、雨が降ると泥んこになる中で子供（あるいは大人も）が半ば裸ではだしてかけ回っているというわが国のあの終戦直後の（とはいっても小生は知りませんが）ありさまが見られるというわけです。

さて私の訪問のひとつの目的としてのインドネシアのエネルギー需給の概要をみますと、まずエネルギー種別の供給は表1、部門別エネルギー需要は表2のようになっています。（データは1978年）

わが国の状況と比べて特徴的なこととしていえることは、まず供給に関して Firewood と呼ばれる薪炭、木炭

表1 エネルギー供給（単位：10<sup>8</sup>boe）

エネルギー種	供給量 (%)
石油製品	107,844 (28.0)
石炭	454 (0.1)
水力	3,900 (1.0)
天然ガス	10,927 (2.8)
薪炭・木炭	262,616 (68.1)
合計	385,741 (100.0)

表2 エネルギー需要（単位：10<sup>8</sup>boe）

需要部門	需要量 (%)
民生用	292,625 (75.9)
輸送用	33,397 (8.7)
製造業	30,575 (7.9)
農業・鉱業・サービス	16,812 (4.3)
電力	12,332 (3.2)
合計	385,741 (100.0)

の占める割合が約7割と非常に大であることです。つまり人口の約8割を占める農村のエネルギー消費はほとんど薪炭に依存しているということです。また石油に関しては、年間総生産量約9000万tのうちの約2/3を輸出し、残りの1/3を国内消費として民生用に主に灯油、ディーゼル油の形で消費しています。インドネシア政府の政策としては、将来は主に石炭を国内消費に使い、石油を石油製品あるいは天然ガスとともに輸出にふりむけようということを目指しているようです。

エネルギー需要に関しては、民生用需要が非常に多いという点は“超近代的”なのですが、それはエネルギー供給の内訳からもわかるように農村部における薪炭、木炭の消費がほとんどであるということです。したがって通常の意味での“近代化”の傾向が民生用エネルギー需要の増加、そして産業用エネルギー需要の減少にあることからすると、インドネシアにおける民生用エネルギー消費は年々減少、そして産業用エネルギー需要は年々増加という逆の傾向にあるわけです。インドネシアのエネル

おおよま たつお 埼玉大学

ギー国内消費の傾向としては、今後しばらく産業用、輸送用が増加し民生用が減少した後に再び逆転の傾向が起こり、民生用エネルギー需要の増加、産業用エネルギー需要の減少となることによっていわゆる“近代化”の道をたどることになるのではないのでしょうか。

大型の新しい乗用車にごくわずかの“金持ち階級”が悠々と（もちろん運転手付きで）乗っているのを除けば“一般庶民”は旧式の乗用車でもバスでもトラックでも定員おかまいなしにどんどん乗り込み危険きわまりないありさまです。また民生用エネルギー需要の主役である灯油の使い方といえば、市内の露店の大衆食堂でも一般家庭でも局所的な（必要なところのみを照らすという）照

明にそして調理用にと実に“有効に”使っています。そしてまたレストランにおける食事あるいはパーティ等における食物にしても（社会的な身分差があるせいでしょうか）残り物はちゃんと誰かが食べるというふうに実に資源のむだのない生活方法を心得ているようです。人間の労力の省力化あるいは時間の有効利用あるいは快適さなどという観点を無視するとしたら、そしてまた国全体としての資源の有効利用ということを一目的とするならば、インドネシアのような国は現在のわが国と比べて真の意味での“最適化”をはかり、より“オペレーションリサーチ的”に生活しているのではないかと思いつつ2度目のインドネシア訪問を終えました。



## 研究部会報告

### ●経営コンサルタント●

- 第33回 日時：12月4日(土) 14:00～17:00  
場所：東京都勤労福祉会館  
テーマ：「井原西鶴と現代の経営・第2回」  
いままで経営学と言いますと「アチラ物」の焼きなおしが全盛で、縦書きのものは、あまり見むきもされませんでした。しかし良く調べてみますと徳川時代にはすばらしいものが数多くあります。西鶴の「日本永代蔵」とか「西鶴の織留」などはその1つだと思います。西鶴では「知恵・才覚・工夫・分別・始末など」の中心概念やカテゴリーが基礎モデルとなって、経営についての考えや観察が展開され、モノと心とが不即不離・表裏一体となってダイナミックに把握されています。

### ●政策問題●

- 8月合宿ゼミナー  
日時：8月29日(日) 14:00～30日(月) 12:00  
場所：箱根宮の下保養所  
出席者：14名  
演題1：勝田龍夫『重臣たちの昭和史』にみる意思決定  
講師：湊 晋平（武田薬品）  
1月例会に引き続き、今回は下巻にあたる、シナ事変、三国同盟、日米交渉をめぐっての近衛、木戸、陸海軍、外交官たちの置かれた立場と、意思決定プロセスを、他

の資料と照合しながら分析し論議した。こうした局面では、意思決定者の資質と、置かれた場面での与えられた条件によって、選択し得る政策の幅が決まってくる。現在の日本の立場と対比すると興味深い。

演題2：ポリシー・アナリシスにおける2,3のトピック  
講師：今村和男（防衛大学校）

政策科学における価値の役割と、その定量化・計測化について、文献紹介・研究集会報告等をまとめて解説した。基本は共通の座標軸をいかに形成するかにかかると。

- 10月例会 日時：10月16日(土) 14:00～17:00  
場所：三菱総研・会議室(タイムライフビル)  
出席者：7名  
演題：ゲマインシャフト結合の分析（ヒューマン・ウェア）  
講師：富沢健一  
組織体を構成するメンバーの地縁・血縁結合の有効性と実体について、事例を交えて報告しこれを討議した。

- 11月例会 日時：11月20日(土) 14:00～17:00  
場所：三菱総研・会議室(タイムライフビル)  
出席者：8名  
演題：エネルギー政策の3つの視点  
講師：柴田祐作(日立製作所)

Policy Science 2編、および Policy Analysis 1編の文献紹介を通じて、エネルギーと社会・政治・経済の関係にアプローチした。このような複雑な意思決定においては、社会システムの構成者の合意を得るため、価値観の検討：山本七平いうところの“空気の研究”が大切である。“空気の流れ”を知るセンサーとして、科学的手法の有効性が論議された。